ヨハネによる福音書 3 章 1～15 節

前回の箇所（2：23～25）は、直前の「宮清め」の記事（同 13～22）と直後の「イエスとニコデモとの対話」の記事（今月の箇所）を結び合わせる「繋(つな)ぎ」の部分でした。「イエス・キリストのしるしを見て、多くの人たちがイエスを信じた。しかし、イエス御自身はそうした人々を完全には信用されなかった」と述べて、2 つの記事を繋いでいます。今月の箇所はその繋ぎを受け、その流れの中に置かれています。

それはいったい、どういうことでしょうか。それは、イエス・キリストを見て、心を惹(ひ)かれる。けれども、イエスが期待されるものとは何かがどこかでズレていて、いま一つピッタリしない。さらには、期待のそれが分かったとしても、なかなかそうなれない自分がなおもそこにいる。そのような人間の一人として「ニコデモ」が紹介されている、と言えはしないでしょうか。

そんなニコデモと私たちとの間に はたして、関係は有りや無しや？ 興味深いところです。

「ファリサイ派に属する」「ユダヤ人たちの議員であった」（1）

・「ファリサイ派」とはユダヤ教の一グループで、その名は「分かたれた者」という意味の言葉から来ていました。

・ユダヤ教の律法を細かに守る人たちで、「自分たちは緩んだ生活をしている者たちとは違う」と、自(みずか)らの信仰に自負の風を漂わせる感もあったようです。「分かたれた・・・」とは そのようにして、ある種 プライドを持って、自分たちを他から区別したということです。

・しかも、10 節を見ると、「イスラエルの教師」とあります。律法の教師としても名の知られた人物だったことがうかがい知れます。

・一方、「議員であった」とは、「サンヒドリン」と呼ばれたユダヤの最高法院のメンバーだったことを示しています。

・ユダヤは当時、ローマ帝国の支配下にありましたが、それでも、最高法院は信仰の事柄にとどまらず、政治の事柄についても、国内でかなりの決定権を有していました。ニコデモはそのメンバーでもあり、政治的にもそれなりの力を持っていた、ということです。

「ある夜(よ)、イエスのもとに来て・・・」（2）

・そのニコデモが「ある夜、イエスのもとに来た」と、2 節は語ります。

・しかし 考えてみれば、ファリサイ派の教師で、しかもサンヒドリンのメンバーでもあったニコデモ。そんなニコデモが「イエスのもとに来た」。言ってみれば、片田舎(かたいなか)出身の預言者気取りのもとに足を運ぶ。そして、こう言います。2 節、「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです」。どう見ても、普通ではありません。いったい、何がニコデモに

そうまでさせたのでしょうか。

・そもそも、ニコデモはなぜ、「夜」やってきたのでしょうか。ニコデモの心の内にあったものとは、はたして何だったのでしょう？

・そして、そんなニコデモの内に、私たちは自分自身の何かを見る思いがしないか。見るとしたら、それはどんなものでしょうか。

「<u>はっきり言っておく</u>」(3、5、11)

・そんなニコデモに対し、イエスは一度ならず、「はっきり言っておく」と繰り返しておられます。

・原語のギリシア語では「アーメン、アーメン（ἀμὴν ἀμὴν）」となっていて、アーメン（ἀμήν）が二度 繰り返されています。

・「アーメン」とは「まことに」「確かに」「そのとおり」とかいった意味合いを持つ言葉で、それを繰り返すのは、大切なことを強調して言うときのイエスの言い方です。

・ならば、その中身とはいったい、何なのでしょう？

・「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」。それが、その中身でした。

「人は、<u>新たに生まれなければ</u>、<u>神の国</u>を見ることはできない」(3)

・一読して分かるように、ここでのポイントは、「新たに生まれる」ということと「神の国を見る」ということの２つの点にあります。

・まず「神の国」ですが、そこには次のような２つの意味合いがあります。

①この世の終わりや死の向こうに用意されてある、いわゆる「天国的な神の国」。

②（物理的な国や地域ではなく）神の力が及んで神の働きが起こっている そのところ。すなわち、「神の支配」という意味。

・今月の箇所は これらのうち、②の意味合いで言われていると言えるでしょう。

・考えてみれば、（イエスのこの返答から見て）ニコデモは神の国について何らかの思いを持って、イエスのもとを訪ねたのではないでしょうか。だとしたら、その思いとはいったい、どんなものだったのでしょう？

・そして、それは私たちが抱(いだ)くそれと相通じるものがあるのか否か。考えさせられるところです。

・一方、「新たに生まれなければ」とは、どういうことでしょうか。実は、「新たに」と訳されている言葉は、元々のギリシア語（ἄνωθεν）では、この他にさらに 2 つの意味をあわせ持つ言葉が用いられています。

①一つは「上から」、すなわち「神から」という意味であり、

②あと一つは「初めから」、すなわち「根っこから」「本質的に」という意味です。

・ヨハネによる福音書は時に 二重、三重の意味合いを込めて言葉を用いることがあり、ヨハネはそれを一つの特徴としているということ。そのことについては、すでに触れました。「新たに」という言葉も、その好例と言えるでしょう。

・ちなみに、ここで「生まれる」と訳されている言葉は、元のギリシア語（γεννηθῇ（ゲンネーセー（イ）） ＜ γεννάω（ゲンナオー））では、（女性が子どもをつくるというよりはむしろ）通常 男性が子どもをこしらえるという意味合いの動詞が当てられています（女性が子どもを産む場合、通常 "τίκτω（ティクトー）"）。

・だとしたら、そこにはどんな意味合いが込められていると考えられるでしょうか。

・そして、「新たに生まれなければ」とは 要するに、何を言わんとしているのか。御一緒に思いをめぐらしたいと思います。

「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。
もう一度 母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」(4)
「どうして、そんなことがありえましょうか」(9)

・ところが、イエスのこの返答を受け、ニコデモが返したのが４節の第一の言葉。

　さらに、5〜8 節で「人が新たに生まれるためには、肉によってではなく、霊によって生まれなければならない」と言われたのに対し、ニコデモが再び返したのが９節の第二の言葉でした。

・ここで気づかされるのは、ニコデモの態度がちょっとばかり、それまでとは変わったように感じられることです。初めの挨拶とは違って、どこか乱暴で、敵意の響きさえ感じ取れないでしょうか。

・実際、イエスの言われたような表現は、旧約聖書の中には繰り返し記されてもいます。なのに・・・？

・何がニコデモにこうした返答をさせたのでしょうか。何がニコデモの内に頭をもたげたのでしょうか。自身をそこに重ねながら、ニコデモの思いの数々を想い描いてみたいと思います。

「だれでも <u>水と霊とによって生まれなければ</u>、神の国に入ることはできない」(5)

・イエスが初めの言葉（3）をいっそう明確に言われたのが、この５節の言葉です。

・「水と霊とによって生まれる」とは ― 仮に、これが後（のち）の教会によって編集加筆されたものであったとしても ― 明らかに、バプテスマ（水に浸す洗礼）が意識されたものと言えるでしょう。

・バプテスマは周知のとおり、イエス・キリストへの信仰を告白した者が受ける教会の式です。

①水に沈むことは「それまでの自分に死ぬ」ことを表わし、

②水から上がることは「キリストによる新しいいのちに生まれる」ことを表わします。

・教会は、水のバプテスマを神の霊（聖霊）が包み、新たな出発への祝福の時としてくださる、と信じてきました。

・新たに生まれて神の国を見、そしてそこに入るのは水と霊とによると言うとき、それは、その出来事の源がどこにあると語っているのでしょうか。

・さらには、そのような経験を内にした者はそれまでと違うどんな自分を見ることができるのでしょうか。大いに知りたいところです。

「<u>風</u>は思いのままに吹く。あなたはその<u>音</u>を聞いても、それがどこから来て、

どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆 そのとおりである」(8)

・それらのことに関連し、イエスが重ねて加えられたのがこの説明でした。

・「霊」とは元来「風」を意味する表現で、そこから「気」や「息」等にも意味合いが広がりました。ここでは、そうした関係のなか、「風」と「霊」とを対(つい)にして 説明がなされています。

・すなわち、風そのものが見えるかというと、どうでしょうか。風自体はもちろん、見ることができません。けれども、風が吹いていることは分かる。その「音」によって、それは分かります。

・つまり、その音によって、風が吹いていることだけは分かる。風そのものは見えないし、それがどこからどのように吹いてきて、どこにどのように向かっていくのかも分からないが・・・、ということです。

・「霊」というのもそのようなものである、と イエスは言われるのです。神の霊（聖霊）自体は、目で見ることができない。しかし、それが働かれていることは、その音によって（すなわち、その「しるし」によって）分かる。聖霊そのものとその御業(みわざ)の詳細は把握できないとしても・・・、と。

・だとしたら、風の音を聴き取り、霊のしるしを見て取るために、私たちに必要なことは何でしょうか。私たちに求められているのは何でしょうか。

・そもそも、ニコデモの周りに それらはなかったのでしょうか。そのようにして、その近くに 神の国（神の働き）は及んでいなかったのでしょうか。

「天から降(くだ)ってきた者、すなわち人の子のほかには、天に上(のぼ)った者はだれもいない」(13)

・こうして語ってこられたイエスはここで、対話の主題を一つの中心的事柄に移されます。それは、これまで触れてきたことの全体がその一点に懸かっていること。それがいったい 何なのか、ということです。

・「天から降ってきた者」「人の子」「天に上った者」とは すなわち、イエス・キリストのことにほかなりません。

・ということは、神の御許(みもと)から遣わされてきた「人の子」である自分以外に 誰もそこに上ったことはない、という意味になります。どこか、宣言にも似た響きがしないでしょうか。

・であれば、だから 何がどうだというのか？ もう一つ踏み込んだ意味合いを、私たちは知りたいところです。それははたして、どういうことなのでしょう？

・そして 詰まるところ、イエスはニコデモに、そうであるが故に 何を期待しておられるというのでしょうか。そして、そうであるが故に何を、この私たちに期待しておられるのでしょうか。

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない」(14)

・今月の箇所は 14 節でこのように述べ、締(し)め括(くく)りに向かいます。それは一見、前後の脈絡が分かりにくく、唐突な感もしますが、旧約聖書の民数記 21 章の記事を背景に持った一節です。

・「モーセが荒れ野で蛇を上げたように」とは、ユダヤの民が神の前に罪を犯したときのことでした。神は蛇を送り、罪を犯した者を噛(か)ませました。それによって、人々は罪を認め、悔い改めて、赦(ゆる)し

を求めました。それに対して神が命じられたのは、旗竿(はたざお)の先に蛇を掲げることでした。モーセは命じられたとおりにしました。こうして、罪の裁きのしるしだった蛇が 旗竿の先のそれを仰ぎ見る者にいのちを与えるものとなった、という出来事です。

・つまり、イエスはここで、この出来事を踏まえて「人の子も上げられねばならない」と言われているわけです。

・であれば、イエスはすなわち、これを聴く者に ここからどういうメッセージを聴き取ってほしいと願われたのでしょうか。

・ヒントは直後の 15 節にあるようです。そして それは、イエスの生涯の全体を意味づける一節ともなっていると言えるでしょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ニコデモの内なる心にどんな情景を想い見る？

どんな葛藤がそこに？

新たに生まれるということを、ニコデモははたして 知るようになるや否や？

ニコデモは自分にとって、どんな存在？

そして、今月の箇所に続く直後にあの 3 章 16 節が記されている、その意味は？

そこに何がしか、大切なメッセージが置かれているや否や？